政治日本研究【第十一號】
2014 年 6 月，頁 362～382

從中文的角度來看日語非謂形容詞的可能性

以兩字漢語為例

葉　秉杰*

中文摘要

在日語語言學中依據形態廣受公認的形容詞有〝い形容詞〞與〝な形容詞〞兩類。本論文依據語法功能，主張〝洗面〞、〝護岸〞等詞彙亦可視為形容詞。這樣的詞彙在形態上，有時在語意上也和〝サ変動詞〞類似，實際上卻如〝*洗面する〞所見，不易做謂語用。另一方面，我們可以看到如〝洗面台〞、〝洗面所〞這樣的定語用法。在日語的國語詞典裡這樣的詞彙有時候品詞沒做標記，我們認為這些詞彙的品詞未能被把握是由於品詞範疇之缺乏所造成的。本論文把這類詞彙從連體詞區分出來，主張這類詞應可視為日語裡的非謂形容詞。並透過認知語言學之基模概念、語意擴張之有無嘗試說明這類詞彙是如何形成的。

關鍵詞：非謂形容詞，漢語，連體詞，動機，基模

* 東北大学博士班

A Proposal of Non-predict Adjectives in Japanese by the Point of View from Chinese Focusing on Two-Word KANGO

YEH Pingchieh*

Abstract

In Japanese Linguistics, adjectives are morphologically classified into two groups: I-Adjectives(い形容詞) and NA-Adjectives(な形容詞). This paper proposes that some lexemes in KANGO such as SENMEN(洗面) and GOGAN(護岸) can be regarded as adjectives by viewing their syntactical function. This group of KANGO lexemes morphologically and sometimes semantically looks like SAHEN(サ変)-Verb. However, it cannot be used as verbal predicate. It is used as modifier such as SENMENDAI(洗面台) and SENMENJO(洗面所). In some Japanese dictionaries, it is not categorized as verb or adjective, and thus we consider this group of KANGO lexemes is not correctly classified. In this paper, I suggest that it can be classified into non-predicate adjective but not pre-noun adjective in Japanese. Also, we focus on its nonoccurrence of semantic extension and illustrate its word-formation by proposing a schema.

Keywords: non-predicate adjective, KANGO, pre-noun adjective, motivation, schema

* Graduate School, Tohoku University

中国語から見た日本語における「非述形容詞」の可能性

—二字漢語を対象に—

葉　秉杰*

要旨

日本語学において形態的な特徴から形容詞として広く認められているものは「い形容詞」と「な形容詞」である。小論は文内機能に基づき、「洗面」や「護岸」のような語も（非述）形容詞と見なせるものであると主張する。このような語は形態上、時には意味上もサ変動詞との類似性を見せているが、実際には「*洗面する」とは言わないように述語として使用することが難しい。一方では「洗面台」、「洗面所」のように修飾語としては用いることは可能である。また、国語辞書類で品詞が無表記にされていることもあるように、このような語は品詞カテゴリーの欠如により、これまで正確に捉えられてこなかったと思われる。小論はこのような語の存在を連体詞と区別した上、このような語は日本語の「非述形容詞」と見なせる可能性を示唆する。その上、このような非述形容詞の語形成規則を認知言語学のスキーマという概念で捉え、意味拡張の有無を手掛かりに語形成の説明を試みる。

キーワード：非述形容詞、漢語、連体詞、動機づけ、スキーマ

* 東北大学大学院

中国語から見た日本語における「非述形容詞」の可能性

―二字漢語を対象に―

葉　秉杰

1. はじめに

日本語（学）で形容詞として広く認められているのは次に示すいわゆる「形容詞/い形容詞」と「形容動詞/形容名詞/な形容詞」である。この 2 種類の分類基準は形態論に基づいていると考えられるが、小論は統語的特徴（文内機能）に基づき、上記の 2 種類の形容詞に加え、(3) に示す第三種の形容詞である“非述形容詞”を提案したい（小論が問題とする二字漢語しか提示しない理由は後述する）。

（1） 洗面所、護岸工事、審美眼、更衣室、防腐剤、補聴器…

（1）における二字漢語は形態上ではサ変動詞と似ており、国語辞書類（利便性を考慮し小論は『デジタル大辞泉』、『大辞林第三版』を参考にした）ではサ変動詞として登録される例があるが[1]後の考察で明らかになる通り、実際動詞として使えない例が多い。また、これまでもほとんどと言っていいほど議論されていない。小論は（1）のような二字漢語を非述形容詞と見なす妥当性を検証した上で、認知言語学の枠組みで、この種の形容詞の語形成の説明を試みる。

[1] 小論が参考にしている『デジタル大辞泉』、『大辞林第三版』は更新が続けられているインターネット版であるため、小論が検索したのはすべて 2014 年 3 月現在の結果である。

2. 非述形容詞とは？

非述形容詞（非謂形容詞）とは吕叔湘・饶长溶（1981）が提案した中国語（学）の新しい品詞カテゴリーであり、(2) に示すような語のことである。(便宜上、日本語と同型かつ（ほぼ）同義の例のみ示す)。

（2） 中国語の非述形容詞の例：小型、旧式、良性、灰色、初級、高度、少量、特級、一等、国営、市立、野生、耐火、天然、絶妙、有機、不良、公共…

吕叔湘・饶长溶は「小型」や「現行」などを例に、これらの語の語構成がそれぞれ名詞、動詞に似ているが、名詞にあるべき目的語用法､動詞にあるべき述語用法が不可能であることを指摘している。

（3） *改買一個小型。(*小型を買い替える。)
（4） *現行了制度。(*制度を現行した。)（同:81）

吕叔湘・饶长溶は（2）に示した語に共通して見られる特徴を次の6点にまとめている[2]。

（5） a. そのまま名詞を修飾することができる (e.g. 小型水庫 (小型ダム))。
b. (中国語で連体修飾をする上で必須な)「的」を介して名詞を修飾することができる (e.g.小型的水庫 (小型のダム))。
c.「是…的」(コピュラ) 構文に使える (e.g. 這個水庫是小型的 (このダムは小型だ)。
d. 一般的に主語や目的語にすることができない (e.g.(3))。
e. 述語にすることはできない (e.g. (4))。

[2] 吕叔湘・饶长溶（1981）は全ての非述形容詞が（5）の特徴を備えているわけではないと補足している。

f. 程度を表す「很」、否定を表す「不」と共起しない（e.g. *很小型（*とても小型だ））。

吕叔湘・饶长溶は以上の特徴から（2）の語は名詞、動詞、形容詞とは異なっていることがわかると述べ、a～c の特徴では名詞や動詞、形容詞との区別がないが、d～f の特徴では名詞や動詞、形容詞と区別できると述べている。そして、（2）のような例が増加しつつあるとして、新たなカテゴリーに分類できると提案し、（2）の語は事物の属性を表していることから、属性詞または形容詞の下位分類として非述形容詞と呼ぶことができるとしている。

小論は上記の特徴を参考にし、日本語における「非述形容詞」を次のように定義する。

（6）「とても」といった程度副詞の修飾を受けず、そして「い」や「な」を伴わずに連体修飾できるが、主語や目的語、述語として用いられない語

日本語には活用体系という制限があるため、自立語と見なすべきか形態素と見なすべきかについて議論の余地があるが、小論は差し当たり上記の定義に従い考察を進める。（6）に一致する例を日本語の非述形容詞と見なす。

3. 日本語の非述形容詞に関する先行研究

日本語の形容詞研究の中に、“非述形容詞”について論じている研究は皆無ではないが、詳細な検討がなされていないように思われる。

ここでは小論と同様に単語の機能に着目した考察を行っている村木（1998、2000、2002、2009a、2009b）をレビューすることにしよう。

村木は（7）に示すような、従来「の」を介して連体修飾をする「名詞」とされてきた語を形容詞と見るべきではないかと主張し、「第三

形容詞」という新しい品詞カテゴリーを提案している。

（7）深紅、一流、だんとつ、指折り、ぴかいち、常套、極上、迫真、一介、とびきり、ひとかど、在来、仮、高速、丸腰、無人、てづくり、横なぐり、不治、未曽有…（村木 1998 より抜粋）

村木が（7）のような語を形容詞と見なすべきだと挙げている理由は、それらの語に名詞にあるべき特徴である格体系が欠如しているからである。換言すれば、（7）のような語は名詞に一般に見られる主語、目的語としての用法を欠いているのである。また、これらの「名詞」の被修飾語に対する疑問文は「何の」ではなく「どんな」であることも名詞と区別されるべき特徴として挙げられている。

村木は第三形容詞に分類できる語には「一介の（研究者）」や「ひとかどの（人間）」のような修飾語としてしか使えない語もあることを指摘し、次のように述べている：「これらの単語は規定用法のみをもつ不完全形容詞と位置づけられる。いわゆる連体詞である。この種の単語は、中国語の「非謂形容詞」（呂淑湘）あるいは「区別詞」（朱徳熙）にあたるものである。ここに属する単語は少ないとされてきたが、実際はそうではないのである」（村木 2009a:68）、「これらの単語は規定用法のみをもつ不完全形容詞と位置づけられる。いわゆる連体詞である。これらは、述語にならないために、肯定否定やテンスなどのカテゴリーを持たない、不変化詞である。（中略）中国語では、「非謂形容詞（述語にならない形容詞）」あるいは「区別詞」、（中略）とされるものとも類似する。ここに属する日本語の単語は少ないとされてきたが、実際はそうではない。」（村木 2009b:13）以上の村木の議論に注目すべきは非述形容詞と連体詞を同じ類としていることである。

また、松原（2009）も連体詞を論じている際に、村木と同じ見方をしており、「一介の」を「一介」＋「の」ではなく、「一介の」を

一つの単位、つまり、連体詞と見なせる可能性を示唆している。

村木と松原は上記のように連体詞を非述形容詞と同等に扱っているが、中国語の非述形容詞は「属性詞」とも呼ばれる（吕叔湘・饶长溶 1981:81）ように、事物の属性を表すのに対し、日本語の連体詞はそうでないものも含まれているため、両者を区別すべきであろう。

また、村木自身も指摘した通り、第三形容詞として例示した一群の単語の中に、連体修飾の際に「の」を必要とするものと必要としないものが混在している。さらに、(7) の第三形容詞に分類された単語の中には、語種の違いや、単純語か複合語かの違いなど様々なものが混在している。「の」が必要かどうかを例に取って言えば、形態素の違いが異なるため、語形成の動機づけも異なると考えられる。したがって、これらの単語の語形成を論じる際に区別すべきだと思われる。

な形容詞が名詞から来たこと及び両者が連続的であること、日本語に活用体系という閉じられたカテゴリーがあること（上原 2002、2003、2007）、日本語において借用語が原則的に名詞として扱われること（加藤 2012:63）を考慮すれば、“の”を介して連体修飾をする形容詞と「の」を必要としない形容詞も区別すべきだと思われる。

小論は連体詞と非述形容詞を異なる品詞カテゴリーと見なす立場から、村木による一連の考察では全く議論されていない（2）のような、第三形容詞と語形成の動機づけが異なると考えられる例を通し、非述形容詞の提案をしたい。

4. 非述形容詞と位置づけられる日本語における二字漢語

本節では日本語において非述形容詞と位置づけられる例について見ていくが、小論では従来でもサ変動詞と捉えられがちな二字漢語を対象に（特に「述語―目的語」という関係の例に絞って）考察を進めることにする。最初に非述形容詞と考えられる二字漢語を例示すると（8）の通りである。

（8） 止汗剤、止痢剤、洗眼薬、鎮痛剤、吐水口、解熱剤、抗火石、抗癌剤、抗生物質、消炎剤、制汗剤、制癌剤、制球力、制空権、制酸薬、制水弁、制吐剤、哺乳動物、脱脂粉乳、変電室、量水器、観海荘、観桜会、観月会、観艦式、観相学、観楓会、観兵式、観葉植物、増圧弁、臨場感、謝恩会、更衣室、受話器、分水嶺、望遠鏡、望夫石、防波堤、防潮堤、審美眼、読唇術、読心術、入湯税、牧羊犬、製氷機、養鶏場、託児所、救命胴衣、蓄音機、接骨院、調音器官、加湿器、拡音器、除光液、補聴器、配電盤、送水車、防腐剤、迎賓館、騎馬像、集電装置、洗面所、観瀑台、耐熱皿、耐震性、耐水性、断熱材、砕氷艦、撥水加工、斬鉄剣、殺虫剤、離乳食、試金石、防弾チョッキ、救急車、跨線橋、救世主、営利事業…

（8)に挙げた例における前項は形態上も内部構造もサ変動詞に似ており、また、例によっては意味上の類似性も見受けられる。例えば、（9）の「洗顔」と（10）の「洗面」はいずれも「顔を洗う」という意味でほぼ同義語であり、「入浴」と「入湯」は「お風呂に入る」という意味で類義語だと思われる。また、「観戦」と「観瀑」は「戦いを見る」、「瀑布（滝）を見る」と解釈されるように、語順だけ和語と逆で、構造上いずれも「述語―目的語」となっており、お互い似通っている。さらに、「読書」や「読唇」などのペアも語構成が似ていると言える。

（9） 洗顔、入浴、乗馬、観戦、読書、謝罪、脱水
（10） 洗面、入湯、騎馬、観瀑、読唇、謝恩、脱脂

しかし、（9）に示した例と（10）に示した例の機能に注目すると、（9）における二字漢語に［-する］をつけ、述語として用いるのは一般的であるのに対し、（10）における二字漢語に［-する］をつけ、

述語として用いるのは不自然に思われる[3]。

（11） 洗顔する、入浴する、乗馬する、観戦する、謝罪する
（12） ?洗面する、?入湯する、?騎馬する、?観瀑する、?謝恩する

また、（10）における二字漢語は一般的に「～をする」という構文の目的語位置にも現れ得るのに対し、（11）の二字漢語はその位置に現れると不自然だと思われる。

（13） 洗顔をする、入浴をする、乗馬をする、観戦をする、謝罪をする
（14） ?洗面をする、?入湯をする、?騎馬をする、?観瀑をする、?謝恩をする

（9）の二字漢語は上記のような特徴を備えているため、「動名詞」と呼ばれることもあるが、（10）の二字漢語は動詞の特徴も名詞の特徴も欠いているため、（9）の二字漢語とは構造上同じく「述語―目的語」と分解することが可能でありながらも、サ変動詞とは区別されるべきものだと判断される。

（8）、（10）の二字漢語は述語としては用いられないが、（15）に示すように（1）、（7）以外の名詞を修飾する例も見受けられる。

（15） 洗面台、入湯客、騎馬戦、観瀑図、謝恩セール

さらに、名詞述語として使えるかに注目すると、これらの二字漢語は次に示すように、文としては不適格だと思われる。

[3] 「-する」をつけ述語として用いられるかどうかを判断するに当たり東北大学の上原聡先生、大友沙樹氏、菅野美和氏、斎藤珠代氏（五十音順）から協力を得た。また、金沢大学の中村芳久先生、東北大学の上原聡先生から発表の機会を得た。ここで感謝の意を表する。

（16） *この場所は洗面だ。*この税金は入湯だ。*この像は騎馬だ。*この台は観瀑だ。*この会は謝恩だ。

これらの二字漢語は形態的には他の第三形容詞と同様に、名詞と捉えられがちであるが、そもそも「国際」などのように、独立して使えないため、一つの独立した語として認定できず、形態素なのではないかという疑問もあるかもしれない。例えば、次の節で検討する影山（1993）はそのような立場である。

しかし、小論は上の検証を踏まえ、これらの二字漢語は非述形容詞と再定義できると主張したい。（8）に示した二字漢語が大辞林第三版、デジタル大辞泉で品詞がサ変動詞とされていたり、無表記とされていたりすることもあるように、これらの二字漢語はこれまで正確に捉えられてこなかったと言える。それも日本語に非述形容詞という品詞カテゴリーが存在しなかったことに起因していると思われる。以上の考察を連続体で示すと次の通りである。

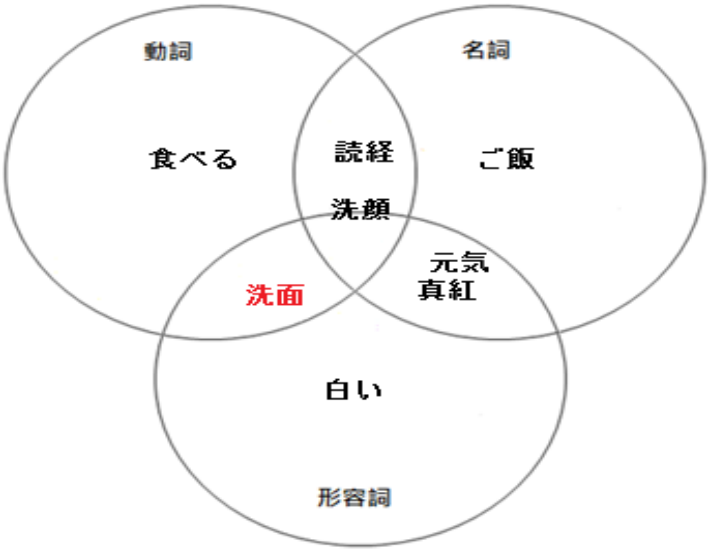

図 1. 日本語における三大品詞の連続体

図 1 の円は動詞、名詞、形容詞という三大品詞カテゴリーを示している。円心に近ければ近いほど、そのカテゴリーにおける典型的な事例を示す。また、周辺に位置すればするほど、そのカテゴリーにおける非典型的な事例を示す。円と円が重なっている部分に位置

する事例は 2 つかそれ以上の特徴を有する事例を示す。それぞれの品詞カテゴリーにおける例を 1 例ずつ挙げて言うと、「食べる」は典型的な動詞、「白い」は典型的な形容詞、「ご飯」は典型的な名詞である。そして、動詞と名詞の特徴を兼ね備えたサ変動詞は動詞と名詞の中間に納めることが可能である。形容動詞/形容名詞/な形容詞及び第三形容詞は語によって変わるが、形容詞と名詞の間に納めることが可能である。図 1 に挙げた「元気」と「真紅」に即して言えば、両者の位置は基準次第で入れ替えることが可能である。連体修飾形が「な」であるか、それとも「の」であるかに重点を置けば、両者を入れ替えるべきなのではないかと思われる。小論は、「元気」の「元気がいい」というような名詞としての用法を考慮し、図 1 のように分類したわけである。いずれにしてもさらに詳細に議論する余裕があるが、紙幅の都合上別稿に譲る。最後に小論の考察対象である二字漢語は動詞と形容詞の間に位置づけられる。これも実は語によって変わるが、動詞と形容詞の間に入れる理由は、わずかながら（8）に挙げた二字漢語に「する」をつけ述語として用いられている例も見受けられるからである。例えば、国立国語研究所少納言 KOTONOHA「現代日本語書き言葉コーパス」で「製氷」を検索すると（17）のような動詞としての用例が 1 件出る。また、1 名の査読者の方からは（18）のような文との指摘があった。

（17） 沸騰させたお湯を冷まして<u>製氷する</u>と透明な氷ができます。

（18） 上向きで<u>洗眼する</u>場合は、液がこぼれないように上を向き、そのまま数回まばたきをしてください。

しかし、例えば、「製氷」は上記のコーパスの 35 件の検索結果中、28 件が連体修飾語として用いられている。また、小論のインフォーマントからも「-する」をつける用法は不自然であるという回答を得ているため、このような用法は形態上の類似により、非述形容詞か

ら動詞への派生だと考えられる。よって、「非述」形容詞ではあるが、小論は差し当たり形容詞と動詞の間に納めることにする。

5. 理論的な枠組み

（8）における二字漢語の語形成を分析する前に、小論の立場を提示しておく。小論は認知言語学の用法基盤モデル（Usage-Based Model）に基づき、語形成を様々な部門やレベルではなく、スキーマ（schema）という単一の概念で捉えようと考えている。語に階層を想定する立場を採らない理由は後述するように、そのような想定は解決できない矛盾が指摘できるからである。

ここで用法基盤モデルを簡単に紹介しよう。用法基盤モデルはその名の通り、実際に使われている言語表現を基盤とする理論である。この理論によれば、語形成規則を含む様々な文法規則というものは生成文法が想定したような生得的なものではなく、様々な言語表現から共通の特徴が抽出され得られたものである。共通する特徴を有する言語表現同士が多いほど（タイプ頻度と呼ぶ）、それらから抽出された規則も強化され、新しい事例へ応用する時に他のスキーマより優先的に適用されると考えられている。ここで Langacker（2000）、早瀬・堀田（2005）の例を取り上げてみると、英語の過去形を表す接辞は周知の通り、概して[V-ed]と[C-{a/o}-ught]との二種類がある。前者のほうが後者より適用できる事例が多いため、新しくできた mail や fax、xerox にも[V-ed]が適用される。

これと似た概念は国語学の西尾（1988）も示唆している。西尾は新しい複合語の語形成は既存の複合語から抽出された「型」を通して行われ、既存の語が多ければ多いほど、抽出された「型」も有力になり、語を作る時に優先的に利用されると述べている。しかし、西尾の示唆は品詞レベルにとどまっている。後述するように、品詞が同じでも関係が様々であるため、スキーマも様々な抽象度があると考える方が妥当である。

6. 二字漢語タイプの非述形容詞の語形成

本節では前節に提示した理論的な枠組みに基づき、なぜ（8）における二字漢語はサ変動詞と形態上似通っているにも関わらず、非述形容詞のようにふるまうようになったのか、その理由について論じてみることにする。

4 節の考察に見たように、小論が非述形容詞と位置づけた二字漢語はサ変動詞として使えない/使いにくい他、連体修飾語として使われる場合も「の」や「な」を必要としない。また、「を」などの格助詞と共起しない/しにくいことから、これらの二字漢語は独立形態素ではないと扱われてきた。

このような二字漢語に関して、影山（1993）が語形成のレベル順序付け（level ordering）を論じた際に少し触れている。影山は日本語には「語根」、「語幹」、「語」と三つのレベルがあると提案し、漢字が語という単位かどうかは字数と必ずしも相関するとは限らないが、一字の漢字は基本的に最小単位の語根であると述べている（同:16-17）。影山によれば、同じ単位の要素同士が結合すると一段上の単位に「位上げ」される。（19）に示す通り、「語根＋語根」は語幹に位上げされ、「語幹＋語幹」は語に位上げされるが、語幹は「国際」のような、そのまま語としての資格を得られない要素もあるが、「中国」のようにそのまま語に位上げされる場合もある。また、単位が異なる要素同士は結合できないと説明している。

（19） a. 語幹→語根＋語根
b. 語→語幹（＋語幹）
c. 語→語＋語 （同:19）

影山の例を借用して説明すれば、「訪韓」は語根同士で、「韓国旅行」は語幹同士の結合であるため、適切な表現である。それに対し、「*訪韓国」、「*韓旅行」はいずれも「語根＋語幹」であるため、不適切なのである。また、漢語の例ではないが、「*食べ歩きもの」に見た通り、「語幹＋語根」という結合も禁止される。

なお、影山は明言していないが、「中国人」という表現が成立し、

「*中人」という表現が成立しないのは、上の規則からすれば、「人」が語幹であるためだと推測される。

この分析を小論の考察対象に適用すると、例えば、「量水器」の「量水」は「国際」と同様に、語幹レベルのままであるため、「器」と結合して初めて「語」という資格を得られるとも考えられる。しかし、このような分析に重大な瑕疵が存在していることが指摘できる。つまり、「量水」という語幹と結合するために、「器」も語幹であると想定しなければならないのである。しかし、「楽器」という表現も成立するように、「器」を語幹だと想定するのは明らかに適切ではない。仮に「器」を語根だと想定すると、「量水器」という表現が「語幹＋語根」となり、（19）に示したルールに従えば、不適切な表現になるはずだった。いずれにせよ、レベルの相違を想定するだけの分析では「量水」がそのまま使えない理由を説明できないと思われる。

さて、小論が分析の手掛かりとして注目するのは（8）の二字漢語の被修飾語への依存性及び意味拡張の有無である。意味上、（8）における二字漢語と類似している和語の動詞由来複合語（deverbal compound）に意味拡張が観察されている一方で、二字漢語は意味拡張がほぼ起きない。

（20） 血止め（物）、#止血
（21） 馬乗り（人）、#乗馬

「血止め」はそれのみで物を、「馬乗り」はそれのみで人を表せる一方、語種のみ異なり、意味も似ており、構成要素（漢字）も同じである「止血」、「乗馬」はそれのみでは物や人を表すことができない。物や人の意味を示すには、次に示すように、物や人などを表す要素を後ろにつける必要がある。

（22） 止血剤、乗馬者

日本語にはこのような表現は枚挙に暇がないほど見受けられる。

（23） 育毛剤、増毛剤、開会式、換気扇、喫煙室、競馬場、競輪場、競艇場、採血室、散水車、除雪車、洗顔料、送風機、脱臭炭、着火剤、着色料、駐輪場、調味料、投票所、入場券、売春婦、避難所、避妊具、停車場、献血車、脱水機、脱毛剤、消臭剤、加速器、加熱器、発電機、発電所、保温器、立法機関、投石器、改札口、吸気弁、排水溝、消火器、消毒薬、浣腸器、消泡剤、洗車機、読書器、放電管、除草剤、炊飯器、乗車券、降車場、受信料、受信機、送信機、参加者、登山客、登山道、登山口、離陸時、着陸時、受験生、入会料、入学式、入水式、着工式、開会式、充電器、集光器、給油口、執刀医、謝罪会見、増税法案、投書欄…

さて、5節で提示した枠組みに基づくと、（24）の事例から共同の特徴である「[[[V][N_1]]N_2]」[4]というスキーマが抽出できる。[[V][N_1]]と[N_2]の関係は様々あり、例えば、「売春婦」、「執刀医」、「登山客」なら、「[[V][N_1]]を（職業と）する[N_2]（＝人）」という意味であるが、ここでは（25）に多く見られる「[[V][N_1]]をするための[N_2]」を例に見てみる。（25）の多くの事例における[[V][N_1]]が[N_2]という物の用途（目的）を示しているため、（26）のような抽象度のより低いスキーマが抽出できると考えられる。

（24） 脱水機→洗濯物等を脱水するための機器
除雪車→雪を除去するための車
駐車場→駐車するための場所
消火器→消火するための器具

[4] ここの「V」、「N」は意味から考えた上での（便宜的な）表記で、それのみで動詞、名詞そのものという意味ではないことに気をつけたい。

（25） $[[[V][N_1]]N_2]$：

$[V]$＝動作

$[N_1]$＝動作の及ぶ対象

$[N_2]$＝物品や場所など

$[[V][N_1]]$＝$[N_2]$の目的、用途

（26）のスキーマの抽出によって、新しい表現を作る「鋳型」の用意ができたと言える。注意されたいのは、（8）の二字漢語の語形成は全て（26）のスキーマを通して行われるとは限らない。先述したような「「$[[V][N_1]]$を（職業と）する$[N_2]$（＝人）」」というスキーマを通し、語形成が行われる可能性もあり得るため、（26）のスキーマは語形成の動機づけの一例に過ぎないことを念頭に置かれたい。

次に注目されたいのは物品などを示す$[N_2]$である。日本語における一字漢字は「人（じん）」や「器（き）」、「車（しゃ）」に見るように単独では使えない例も数多く存在するが、「ひと」、「き/うつわ」というように理解されている。理解しやすいようここでは「車」を例にとって話を進めよう。「車」を始め、人工物は基本的に特定の目的を果たすために作られている。そして、そのカテゴリーに属する成員が増えるにつれ、新しくできた成員の目的を示すために、物品を示す名詞の前に目的を示す表現をつける必要が生じると考えられる。

目的を示すのに利用可能なスキーマは様々であるが、$[[[V][N_1]]N_2]$というスキーマを利用する場合、前項の$[[V][N_1]]$は既存の語からも選択できれば、場合によっては西尾（1961）が述べたような類推的創造（analogical creation）を行うことも可能である。すなわち、（8）における二字漢語の由来は物品の目的である属性を示すために作られた表現だと考えられる。そうであれば、（8）の二字漢語はそもそも属性を示すのに作られたため、サ変動詞として使えないのは必然の結果だと言える。

以上の考察に基づくと、そのような表現は本来「洗面台」などのように、一つのユニットだったと見なすべきだと考えられる。この

点、「補聴器」などに見られるように、修飾できる対象が限定されている語が存在していることからも窺える。また、このタイプの非述形容詞に対する疑問詞は「どんな」でも「何の」でもなく、「なに○○？」（e.g. なにしゃ？）であることもこのタイプの非述形容詞はそもそも事物を表す語または形態素（（26）の[N_2]）とは一つのユニットだったことを裏付けている。しかし、先述したように、このようなユニットの前項は後項の目的など属性を示すと理解されている。そのため、使用につれ新しくでてきた物品の属性を示すのにも使われるようになることがあると考えられる。（8）と（24）の関係も合わせて図示すれば、次の通りである。

（26）意味拡張しない二字漢語（サ変）を利用し、物を示すため、（24）に示したように「所」や「器」、「室」などをつける。

↓

事例から[[[V][N_1]]所]など、様々なスキーマを抽出できる。

↓

[[[V][N_1]]所]のみでは何をする場所か不明であるため、[洗面]などの表現を作る。

↓

（8）に示した[[洗面]所]などの表現ができるが、語形成の動機づけは[洗顔]とは異なり、そもそも何をする場所かを示すため、サ変としては必ずしも用いられるとは限らない。

↓

[洗面]は顔を洗うと理解されているため、[[洗面]所]から抽出される。非述形容詞というカテゴリーの形成。

↓

[[洗面]台]のように、他の物品の目的を示すのに使われる 。

↓

サ変との形態上の類似により、[-する]をつけ用いられることもまれにある（逆形成）。

最後に借用語である可能性について簡単に触れておこう。小論で取り上げた非述形容詞は漢語であるため、上述の動機づけから作られたのではないことも考えられる。確かに（8）における二字漢語の中に中国語と同型の表現がある（e.g. 抗生、騎馬）ことを考えれば、その可能性は否定できない。しかし、同型ではありながら、用法が異なること（e.g.「洗面所」の中国語訳は「洗手間」であり、中国語における「洗面」も修飾語として用いられているが、「洗面乳」（洗顔料）に見るように日本語と異なる）、（8）に挙げた表現の多くは『重編國語辭典修訂本』に掲載されていないことから、小論の主張は語形成の動機づけの一つとして妥当だと考えられる。

7. 終わりに

以上、小論は形態上が似通っている二字漢語をサ変動詞から区別されるべき非述形容詞の存在を明らかにした。

小論は二字漢語を対象に見てきたが、和語で作られた非述形容詞と考えられる複合語も実は数多く存在している。

（27） パン焼き機、魚焼き網、蚊取り線香、ハエ採り草、ハエ採り紙、あぶら取り紙、菜切り包丁、フタ止めシール、雪解け水、魚釣り竿、種取り梅、窯焼きピザ、手焼き煎餅、手包み餃子、手ごねハンバーグ、壁掛けテレビ、甕だし紹興酒、時間貸し駐車場、包丁切りうどん、棚落ち商品、早ゆでパスタ、石臼挽きそば、朝採り野菜、後入れ調味料…

（28）の例は伊藤・杉岡（2002）の主張によれば、「ゴミ拾いをする」や「手紙を手書きする」のように、普通名詞や動名詞として用いられるはずである。しかし、（28）に挙げた例は修飾語として用いられるのが一般的であるため、（非述）形容詞と見なすべきであろう。

このように、量的に考えても、非述形容詞という新しい品詞カテゴリーの提案は妥当だと言える。4 節でも述べたように、これまで

これらの語が正確に捉えてこなかったことは、品詞カテゴリーの欠如に起因していると考えられる。従って、新しい品詞カテゴリーの構築の国語辞書の改良に繋がることも期待される。

今後の課題として、次のようなことを考えている。まず、小論では（26）のようなスキーマを例に考察を行ってきたが、[執刀医]や[救世主]など、小論の考察対象と異なる関係の例についても考察したい。

次に、小論が示唆した本来の語形成の動機づけが消え、単独な規則として定着するスキーマの存在可能性を検証したい。

さらに、（8）のリストからわかるように、どのようなＶとＮの組み合わせが非述形容詞になりやすいか、小論の主張では予測できない。なぜなら、（27）に示した通り、この種の形容詞の語形成を動機づけているのは主要部の形態素（に関する百科事典的知識）であり、語構成要素自体ではない。ただ、予測できなくても、どのような組み合わせは非述形容詞として用いられるか、その傾向を把握するため、今後量的研究を行い検証したい。

参考文献

伊藤たかね・杉岡洋子（2002）『語の仕組みと語形成』研究社

上原聡（2002）「日本語における語彙のカテゴリー化」『認知言語学Ⅱカテゴリー化』81-103、東京大学出版会

上原聡（2003）「何故プロトタイプ構造か―日本語の「形容動詞」に見るプロトタイプ構造形成の歴史的考察―」『認知言語学論考』51-91、ひつじ書房

上原聡（2007）「認知語形成論」『音韻・形態のメカニズムー認知音韻・形態論のアプローチ』99-151、研究社

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房

加藤重広（2012）「日本語における名詞性」『日中理論言語学の新展望３　語彙と品詞』51-76、くろしお出版

西尾寅弥（1988）『現代語彙の研究』明治書院

早瀬尚子・堀田優子（2005）『認知文法の新展開　カテゴリー化と用

法基盤モデル』研究社

松原幸子（2009）「日本語の連体詞は少ないか」『国文学　解釈と鑑賞』74 巻 7 号 113-123、至文堂

村木新次郎（1998）「名詞と形容詞の境界」『月刊言語』27 巻 3 号 44-49、大修館書店

村木新次郎（2000）「「がらあきー」「ひとかどー」は名詞か、形容詞か」『国語学研究』39 号 1-11、東北大学文学部

村木新次郎（2002）「第三形容詞とその形態論」『国語論究第 10 集現代日本語の文法研究』211-237、明治書院

村木新次郎（2009a）「日本語の形容詞は少ないか」『汉日理论语言学研究』64-72、学苑出版社

村木新次郎（2009b）「日本語の形容詞－その機能と範囲」『国文学　解釈と鑑賞』74 巻 7 号 6-19、至文堂

吕叔湘・绕长溶（1981）「试论非谓形容词」『中国语文』第 2 期 81−85

Langacker, Ronald. W.（2000）A Dynamic Usage-Based Model, In *Usage-based Models of Language*, Michael Barlow & Suzanne Kemmer, 1-63 (eds). Stanford: CSLI、坪井栄治郎（訳）「動的使用依拠モデル」坂原茂（編）（2000）『認知言語学の発展』61-143、ひつじ書房

辞書

大辞泉編集部『デジタル大辞泉』http://dic.yahoo.co.jp/

松村明（編）（2006）『大辞林第 3 版』http://dic.yahoo.co.jp/

教育部國語推行委員會（編）（2007）『重編國語辭典修訂本』中華民國教育部 http://dict.revised.moe.edu.tw/index.html

コーパス

国立国語研究所少納言 KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/